

北極星を めざして

アレックス・ヘイリー

松田銑訳



社会思想社

二日星を ハル151号で めぐらして

アレックス・ヘイリー

松田銑訳

社会思想社

A Different Kind of Christmas
Copyright © 1988 by Alex Haley
Japanese translation rights arranged with
John Hawkins & Associates, Inc., through
The English Agency (Japan) Ltd.

北極星をめざして

一九八九年一〇月三〇日 初版第一刷発行

著者 アレックス・ヘイリー

訳者 松田銃

装幀者 平野甲賀

発行者 宮川安生

発行所 株式会社社会思想社

東京都文京区本郷三ノ二五ノ一三（千一一三）

電話東京八一三・八一〇一

振替東京六一七一八一二

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 合資会社黒田製本所

〒1989 0097-60326-3033

価格はカバーに表示してあります

丁・乱丁本はお取替いたします

北極星をめざして

勇猛心と献身の精神によつて
「アシダグラウンドレールロード地下鉄道」を可能にした、
すべての人たちを追慕して

I

一八五五年三月のある日の午後、学生部長C・トマス・リッジレーは大学の自分の事務室に坐っていた。変人と言われるほどに派手なことが嫌いで、正直一途の主人公の性格を反映して、それは一切装飾なしの質素そのものの部屋だった。彼のデスクの前には、とび色の髪、がっちりした体格の二年生が先生の前に出たときの作法どおりに直立不動で立っていた。フレッチャー・ランドール十九歳。南部のノースカロライナ州からこの北部のニュージャージー州プリンストンにやってきたランドールは、先日学寮を変りたいという願いを出していた。リッジレー学生部長は、他にはなにもないデスクの真ん中にただ一つ

載せてある学生身上書ファイルの上の、その願書から目を上げて、ランドールの顔を見た。

「これによると、君は転寮を希望しているようだな——学年も半ば以上過ぎているのにね——『身上の理由』ということのようだが、もつとくわしく説明してくれたまえ」

「まったくの個人的な問題であります」とランドールは答えた。

「あのねえ君、わたしは学生部長として、学生諸君の個人的な問題、時には内密の問題にまで関心を持たなきゃならないんだ。さあもつとくわしく話したまえ」

「ご理解いただけると思いますが、南部の人間がこのニュージャージー大学に在学しておりますと、むつかしい立場に立つことが多いのです」

フレッチャーは話しつづけた。「僕も現在の寮で、ニューヨークから来たトム・バレットという三年生とうまくいかなくて困っています。バレットと四、五人の仲間とは南部の反逆者をやつつけるんだといばり散らしています。僕は

先生のところへぐちをこぼしに來たと思われたくはありません。ただ本当に不幸なことにならないうちに、部屋を変わらなければいけないと思うだけです」

リッジレー学生部長は、この学生間の衝突をひき起こした、危険な地域的偏見にはこの際ひとまず触れないでおこう、今日は南部のショービニズムの妄想や、それが招く危険や社会的影響、あるいは奴隷制度の非人道性などについて説き聞かせるに適當な機会ではないと考えた（もともと「人間が人間を用いて作り出したものを嘆かずにはいられようか」というワーズワースの言葉を引用したい気持ちは大いにあつたけれど）。なんと言つてもこの青年は、みずからをギリシアやローマの奴隷保有の文明になぞらえる社会と階級との所産なのだ。しかしこのフレッチャー・ランドールは明らかに内省的な性格の持ち主で、乗馬と狩猟と飲酒が大好きな南部人種の仲間ではなく、大学生活にありがちな粗野な、ふざけ半分のやりとりなどに耽るタイプではない。リッジレー学生部長はそう腹の中で思案した。

彼は笑顔こそ見せなかったが、表情をやわらげて、机の一番上の引出しから

幅の狭い茶封筒に鍵を添えて取り出した。「ランドール君、転寮を許可する。今までどおりの個室に入りたまえ。君のご両親は初めから、同室の友人が君の勉強の邪魔になつてはいけないと心配されて、個室のための割増寮費を支払うと言つていられた。さあ、これが新しい部屋の鍵とわたしの許可書だ」

リッジレーはじつとフレッチャーの顔を見つめながら、言葉を継いだ。「念のために君に一つ言つておきたいことがある。君はこれまでいつも優秀な学業成績を示している。それはまことに結構だ。わたしはここにある君の成績簿を調べていたところだが、君は入学以来いつもクラスの上位十パーセントの中に入っている。しかしひよつとすると、君はその他の大切なこと、例えば親友を作るといふようなことをないがしろにして、学業だけに熱中していたのではないかね」学生部長はまた笑顔に近いやさしい表情になった。「それからね、ランドール君。居場所を変えるだけでは必ずしも問題解決にはならないということも、ひとつ将来のために覚えておくことだね」

そしてリッジレーは目で戸口の方を指した。「退^{さが}つてよろしい」

「ありがとうございます」

ランドールは学生部長が転寮を許可してくれたのでホッとして、現在の部屋の方へ急いで帰っていった。もうこれ以上生意気なトム・バレットの顔を見るのも嫌な気持ちになっていた。バレットは水泳のチャンピオンで、伊達男^{だて}の標本のようなきざな奴で、そのうえほら吹きで、なにかあると、父親がニューヨークの銀行家だと言って自慢した。そのバレットの仲間がまたろくな奴がいなかった——やはり水泳選手のピーター・エスタブルック、有名な男子衣料品業者の一族のエドガー・アスコット、有名な弁護士の子のウィリヤムズ・ゲインズ。彼らは南部から来た学生たち、とくに寮のすぐ近くの部屋にいる、孤独な勉強家のフレッチャー・ランドールをいじめ、からかって喜んでいた。

南部言葉のまねをしたり、コルクを焼いた、黒い灰を顔に塗りたくって、「ヘエ、ヘエ、だんなさん」と黒人奴隷の道化をしたり、急に低く前かがみになって、ヨタヨタ前へ歩き、奴隷の綿つみの格好をするなどの嫌がらせが彼らのお得意だった。

フレッチャ―・ランドールは第一学年の終わりの夏休み二か月間を郷里で過ごしながら、それまで一年間の経験をふり返り、第二学年ではぜひ二つのことをやりとげようと固く決心して、大学へ帰ってきた。第一は、次の三年間はクリスマス休暇だけに帰省し、夏休みはプリンストンに残って勉強して、三年間で学士号を取ることだった。彼がその誓いを両親に告げると、裕福な農園主で州の上院議員の父親は議場での演説そっくりの大声をはり上げて、「でかした、でかした。それでこそおれの息子だぞ！」と誉め、母親は（彼の予想どおり）しくしく泣き出し、その日一日じゅうハンカチで目を拭いていた。第二の誓いは、北部の連中と対決する破目になったら、できる限り南部言葉を使いまくってやろうということだった。

といっても、フレッチャ―は、南部から来た同郷の学友たちとも折合いがよかったわけではない。第一学年の間じゅう、彼はキャンパスの外れにある、南部学生たちの溜り場「サウス・ハウス」でくりひろげられる酔態を見て、ゾツとせずにはいられなかった。なかでも忘れられないのは、「ラストイ・ウィ

バーというジョージア州出身の赤毛の学生にひどい目にあわされたことだった。ウィーバーはジョッキ一杯のビールを彼に浴びせかけ、ハイエナの吠えるような笑い声をあげ、それつの廻らぬ口調で「こら、ノースカロライナのターヒール（ノースカロライナ住民の俗称。起原不明）、一杯飲め！」とまわりに響き渡るような大声でどなった。

もう一人、ケンタッキー州の小さな町の出身で「ホス」・ランキンという、背の低い毛むくじやらのふとつちよで、下品なことばかり言う学生がいた。その男はフレッチャーが自分を避けているのに気づき、そのお返しとしてフレッチャーをレスリングの技で後ろから締め上げ、いまにも肋骨がポキンと折れるかと思うほどに痛めつけた。

しかし南部出身の学生団のなかでいちばん迷惑なのは、每学期末の優等生名簿にきまってフレッチャーの高い席次が発表されることや、自分たちがたいはい相部屋にいて、勉強はそっちのけでワイワイ騒ぎ合って楽しんでいるのにひきかえ、フレッチャーが個室に納まって超然としていることに反感を持つ手合

いだった。彼らはフレッチャ―を見かけると野次を飛ばし、野卑な皮肉や冗談を言った。

例えばある晩、フレッチャ―はいつものように数冊の本と二冊のノートを抱えて「サウス・ホール」へ入り、本とノートを置いて、紅茶を取りに行つた。

しかし元の場所へ戻つてみると、本とノートが見えない。彼は誰かのいたずらだと知りながら、しばらく黙つて探し廻つていたが、半時間ばかりすると本気で腹を立てた。すると、あたりではくすくす笑いが始まつた。フレッチャ―はいよいよ怒つて、もう少しでみんなとどなり合いをするとところまでいったが、その時、ヴァージニア州出身の「オックス」・ペアードという、熊のような大男の三年生が近くのテーブルをドシンと叩いてわめいた。「もう止める。うるさいぞ。このターヒールに本を返してやつて、帰つて勉強させろ。みんなもここに坐つて、ビールばかり飲まずに、ちつたあ勉強しろ！」フレッチャ―がムカムカしながら「サウス・ホール」を出て行くと、一人の酔っぱらいが「南部の誇り、フレッチャ―」とやじり、もう一人が音頭をとつて囃し立てた。

フレッチャ―が身のまわりの品をまとめて、キャンパスの反対側の新しい寮舎に運んで、落ちつくまでに三十分とはかからなかった。その夜、彼は翌日国語の時間に提出する作文の宿題に取り組んでいた。作文の題目としては、なにか好きな時事問題を選ぶことになっていたので、ホイッグ党の北部諸州の党内派閥「シルバー・グレー」派と「コンシエンス・ホイッグ」派について論じようかなと考えてみた。大部分がニュー・イングランドの党员である「コンシエンス（良心派）・ホイッグ」は強硬な奴隷制度反対論者で、それに対して南部の「コットン（綿花派）・ホイッグ」と協力しようとする北部ホイッグ党员は「シルバー・グレー」派と呼ばれていた。^{*＊}しかしフレッチャ―は結局、すべての南部人が憎悪している本『アングル・トムの小屋』（一八五二年単行本として出版）の著者H・B・ストウ夫人が当時イギリスを訪れ、最高位の貴族や政治家たちの多くに歓迎され、尊敬されていることを鋭く批判した文章を書こうときめた。彼が十時半ごろその皮肉たっぷりの文章の四ページ目に没頭していると、ドアを低くノックする音がした。

いったい誰だろう？　こんな時間に？

ドアを開けてみると、そこには三人の学生が立っていた。三人とも同じぐらの年頃で、おたがいに生き写しのように似通っていた。三人の真ん中に立っている、いちばん年かきの学生が言った。「君がここに移って来られたと聞いたので、会いに来たんです。僕たちは友会徒フレシズです」

フレッチャーは六つの目がじっと自分に注がれているのを感じ、その言葉を聞き、この三人の青年になにか人並みでないものを感じた。彼らのもの静かな態度のなかに一種の迫力がこもっていた。

しかしフレッチャーは、今夜寝るまでに作文を仕上げておかなければならなかった。「それはありがとう。僕はフレッチャー・ランドールといいます。しかし申しわけないけど、僕はいま、明日の宿題を書いている最中なんで……」そう言いながらも、六つの目で評価されていると思うと、なんだか落ちつかなかった。

三人のなかのいちばん年下の学生が笑顔で答えた。「わかってますよ。僕も

国語のクラスに出ているから」

フレッチャーはやっと自分も笑顔になって話した。「そうでしたね。そんならまたいつか都合のいい時に来てくれませんか」

三人はうなずいたが、フレッチャーは思わず聞いてしまった。「君たち三人は親類なんですか？」

真ん中の学生がそれに答えた。「兄弟です。僕たちはフィラデルフィアの^で出で、自分たちのことを『友会徒^{フレシズ}』と呼びます。われわれの宗派のことを聞かれたことがあるでしょう、——『クエーカー』です。われわれの意見とあなたがたの意見とがくい違っている問題について、一度お話してみたいんですよ」

三人は、来た時と同じように静かに廊下を出て行った。

フレッチャーは作文にもどったが、ややもすれば「クエーカー」という言葉が心に浮かんで気が散った。彼はその宗派について聞き知っているあれこれのことを思い出そうと努めた。

「クエーカー」というのは宗教団体だが、極端な平和主義者の団体だった。

彼はその平和主義を茶化したジョークを聞いたことがあった。あるクエーカーの家に夜更けにどろぼうが忍びこんで、せっせとめぼしい品物をかき集めていたが、ふと気がついてみると、その家の主人が下着姿で銃をつきつけて立っていた。その主人が言った。「友人よ、これからそつちに向けて射つぞよ。あぶないぞよ」

フレッチャーはその小咄こはなしの次に、やっと肝心なことを思い出し、どうしてそれを忘れていたのかと自分でいぶかった。というのは彼の父が、奴隷制度、とくに奴隷の所有、売買に反対する連中として目の敵かたきにしている相手こそ、そのクエーカーだということだった。

フレッチャーは、もしあのクエーカーの三人兄弟が、大勢の奴隷を所有している家の息子である自分に向かって奴隷制問題の議論を吹っかけてきたら、相手にしないで、すぐに帰ってくれと言ってやろうと決心した。

訳注*

プリンストン大学の旧名。同大学は一七四六年ニュージャージー州エリザベスにニュージャージー大学という名称で設立されたが、後に同州ニューア